

○兒童の個人性

——ヘイワード氏『ベスタロッチ及フレーベル』の教育觀より——

紹介子

兒童の個人性に就ては、ベスタロッチもかなり説いて居りますが、フレーベルの方がより多く説いて居ります。

ベスタロッチは「人は自ら學ぶやうに力づけられなければならぬ、而して自由に發達するやうに許されなければならぬ、斯くして始めて種々異なる個人的才能が出現し、且又顯著となるのである」と言つて居ります。彼はもつと強い、誇張的な言語を以て次のやうにも言つて居ります。「個人の固有の性質といふものは、私の考では、人間性の最大なる幸福であり、人間性の最大にして且つ最も本質的な幸福の基礎である、それ故にこ

の固有の性質といふものは極度に尊重せらるべきである、而して彼は圖畫の時間に釣合の取れた美しい形を工夫するやうに兒童を奨励しました。

ベスタロッチは壯年時には、一般の教育論を、兒童の個人性に對して何等の寄與をも爲すものでないといふ理由で排斥して居りました。人類全體ばかりを考へて、一人々々の個人といふものを考へない單なる教育論は無價値であると彼は考へたのであります。

けれども、しばらく經つて後、彼は如何なる教師にも等しく巧みに應用することの出来るやうな「方法」を夢想して居るのであります、而して復

しばらく経ちますと彼は、教育の一般組織が個性を破壊するなどと考へるのは間違ひであると言ひ出しました。個々の兒童の個性を認めて、これを教養するところに教育の一般性が存する、「方法」は兒童の中に能力として既に存在してゐない何物をも發達させやうと望みはしない、而して又この能力はそれ自身から、即ちそれ自身の中心から發達すると彼は言ふのであります。

兎に角、この問題に關するベスタロツチの言説は餘程フレーベル式であります、けれども私達はこの兩人が大體に於て、學校教育ではなく家庭教育を考へてゐたのであるといふことを忘れてはなりません、若し學校教育を論じて居るとしたならば生徒の個人性に就て嚴格に考へることは禁ぜられるであります。乃でフレーベルが言ふ如き勸告は不幸にもそれが價ひするよりも、より尠き服従を受けなければならぬのであります。六十人七十人乃至百人もの生徒を收容して居るクラスで

は貨幣を造るやうに、生徒を一つの鑄型に倣めて了ふやうなことになるかも知れませんが、これは止むを得ないことであります。それに弊害が伴ふとはいふものゝ、「自然」尊崇者が想像する程の甚しい弊害は先づ無いであらうと思ひます。

軟教育學と硬教育學

現今の教育界には硬教育學に傾いて居る教育者と軟教育學に傾いて居る教育者とがあります。ヘルバルト學派の人々は興味といふことに力點を置いて居るために、この後者の方に屬して居るやうに言はれて居ります。ヘルバルト學派の所謂興味とは眞の自己活動と同じ意味で甚だ積極的なものであります。けれども彼等は單なる形式的教育の組織——生徒を抽象にのみ赴かしめ、事實の滋養分を取り去つて了ふ組織に對して、烈しく抗議するのであります。如上の見地からベスタロツチを研究してみるのも興味のある、有益な仕事である

と思ひます。

ベスタロッチが兒童に關して——彼が非常に愛してゐた自分の息子に關してすらも——決して弱々しい感情に耽つてゐたのではないといふことは明かであります。彼は自分の息子が欲しても欲しくなくつても必ず毎日規則正しく勉強させやうとしたのであります、このところはペンソン氏の、

「覺生の仕事は精神的努力が行はれたか何うかを調べるに在る」といつたのとよく似て居ります。

ベスタロッチは體操をそれ自身の目的に於てあまり注意しませんでした。よく意味の分らない言葉を知つて居るといふことは眞實を獲得する上に於て甚しい障礙を爲すものであるといふやうなことも彼は言つて居ります。

兎に角ベスタロッチの若い頃に發表したいいろいろの言説には硬教育學に傾いて居るものゝ多いことは事實であります、彼は自己抑制や氣に向かぬ仕事をするこゝとや六ヶ敷い學課を義務で學ぶこゝと

やを尊重しました。遊戲で兒童を保育して行くことなどは決して彼の同情を得ることは出来ませんでした。彼は仕事は仕事、遊びは遊びと別々に考へてゐたのであります。ルンオの影響が著しく、カントの名が未だ知られなかつた頃に斯る説を爲したのでありますから注意を惹くに足ると思ひます。

ベスタロッチはヘルバルト學派の所謂興味を理解して居りません。ヘルバルト學派の立場へそれは屢々弱々しい、感傷的なものであると誤解されることがありますが、ベスタロッチの立場よりは遙かに進んだものであります。乍併、智識も統覺的の興味も、徳そのものすらも、力といふものがなかつたならば、又或る種の敏捷が習得され、時々骨折仕事に堪え得る頑強さがなかつたならば何の役にも立ちますまい。現代の最も忌むべき傾向の一つは行爲の力を缺いた智識、努力の力、征服の力を缺いた洞察の流行でありませう。

けれどもベスタロッツチ自身の經驗に徴してみま

しても、先生が熟練して居る場合には或種の強い興味が、形式的な又抽象的な勉強からでも起され得ることは明かであります。五歳や六歳の兒童でも數や形を扱つて數時間を喜んで過し得るのであります。けれども第二の形式的學課、文法（自國語の文法其他）に對してベスタロッツチは些の顧慮をも爲しませんでした。彼は文法は殆んど興味を與へることの出来ない學課であると考へたのであります。スリングのやうな老練な教師でも文法を面白い學課とすることの出来なかつたのは事實であります。けれども普通の先生に取つてはすべての形式的學課は具體物と近密な關係を有してゐない限りは、換言すれば形式的な學課は全然形式的に取扱はれるのではない限りは興味あるものとはされません、ベスタロッツチは算術に關聯してこの事を明かに述べて居ります、「事物の眞の關係はすべての計算の底に横つて居る」と彼は言ふのであり

ます。

智 的 獨 立

前節に於て述べたことを他の方面から、もう少し考へてみませう。

兒童は自ら考へるやうに教へらるべきであるといふ勸告は今日では一般に認められて居ることでもあります。

自分で考へるといふことは力の一形式でありまして道の表示ではありません、嚴格な制限内に於ていなくこの提言を學校で採用することは非常に危険であります。自分で考へるといふことに莫大な効果があるならば兎も角、こればかりに頼つて他を顧みないといふことは亂暴であります。勿論自分で考へることの必要は分つて居ります、けれども世界に於てこれまで考へられ、言はれたことの中の最上のものゝ幾部分かを知り、善なるもの、偉なるものに對する敬信の萌芽を持つといふ

ことは自分で考へることよりも更に必要でありま
す。

ペスタロツチは一體何の位まで兒童をして自分
で考へさせやうとするのでありませうか。イベル
ドンの彼の學校に於ては、生徒は幾何學を案出さ
せられます、教師はたゞ到達すべき結果のみを指
示し、生徒をしてその過程を辿らしめるのであり
ます。算術も同様にして教へられます。勿論これ
は十分に正當であります、數學の主なる價值はそ
れが與へてくれることの出来る心的訓練にあるの
でありますから。たゞこの危険は他のことを閑却
することであり、ペスタロツチの學校に於て
も數學に重きを置くのあまり、この弊を免がれる
ことが出来ませんでした。而かも尙私はこゝでも
う一度人は自分で學び、自由に發達すべく力づけ
らるべきであるといふことを繰返して置きたいと
思ひます。

ペスタロツチも他の場所に於て、兒童はあらゆ

る學課に於て、自ら深く調べて行く力を持つやう
に導かるべきであると言つて居ります。

これは半面の、若しくは四半面の眞理でありま
すが兎に角眞理であります、而して個人性に關す
るペスタロツチの原理からは當然引き出さるべき
系論であります。

早熟の思慮深さや獨立を獎勵するのは危険であ
ります、而してこのことはペスタロツチもよく知
つて居ります、皮相的な、憶測的な間違つた判斷
の成長を防ぐために、判斷や推理を働かせる前に
先づ注意や觀察や記憶を働かせることの必要を感
じます、否極く幼い兒童に對しては決して理窟を
説いて聞かせるべきではありません。學習の時代
は判斷の時代ではありません。

然るに他の一方に於て私達は、彼が「兒童は先
づ感すべく及び思ふべく教へらるべきである、次
ぎに話すべく、而して最後に讀むべく及び書くべ
く教へらるべきである」と言つて居るのを見出し

ます。この場合に於ける思ふといふことは無論、觀念を持つといふ位の意味に解せらるべきであります。問答^{ソク}究理^{ラチソク}的な方法は既存智識の背景もなく言語の智識にも乏しい兒童には應用し難いものであります。

大體に於てベスタロッチはこの問題に關してはしつかりした判斷を示したやうに思はれます、彼はヒューマニスタツクな教育の要求とは没交渉のやうに見えますけれども、獨立した思想は廣い經驗によつて先立たねなければならぬといふことを認めて居ります。

フレーベルは明かに「自己活動」を尊重して居りますので、獨立した思想を奨励するに傾いて居るのは當然であります。兒童は自身で行爲し、觀察し、實驗しなければなりません、而して兒童の質問は忽諸に附されてはなりません。

斯る勸告はたいそれだけならば危険でありますがフレーベルは幸にもベスタロッチと違つて兒童

の他の要求——例へば人情的な材料を供されること——を見て居ります、それですからフレーベルの教育法の傾向は單なる心的「力」を創造し、喚起するばかりでなく、この「力」を人格の用に供せんとして居るのであります、フレーベルも亦ベスタロッチと同じく兒童に對して、究理力は最後に生ずべきものであつて、その前に觀察や記憶や想像が發達されねばならぬと言つて居ります。

勉強の集中及び相依

ヘルバルト學派の人々は地理が歴史を助けるやうに相互に助け合ふことの出來るところの同格的題目を非常に尊重して居ります。彼等は斯くしてすべての智識の究理的統一感が得られると思つて居るのであります。これを目掛けてゐるのには實際的の理由もあるのであります、孤立した智識には興味がありません（統覺が起り得ないからであります）、それに記憶に止めて置くことが困難であ

ります。それですから一つの學課が他の學課の學習、記憶を助けないならば努力を無駄に費すことが多いこととなるのであります、而して輻輳した諸學課の弊も亦斯様にして倍加されるのであります。ヘルベルト學派の人々の中には學課の中心を作つて、これに屬すべき一群の學課目を選定しやうとしたものさへあります。

學課の集中及び相依の問題は現今では著しいものであります、ペスタロツチとフレーベルはこれに關してどんな考を懷いてゐたかを次ぎに調べてみませう。

ペスタロツチは學校の勉強と家庭の勉強とに連絡をつけること——家庭で受けた觀念を更に進んだ智識の獲得の出發點として用ゐることに重きを置きました。尙ペスタロツチは地理を博物學や農業や地方的地質學等に結びつけました。乍併彼は時間割などを作ることは思ひ及びませんでした。

彼は又兒童に一時に二つのことをさせやうとし

ました。一方手で仕事をしながら、一方智識的の仕事に従ふことを彼は兒童に行はせたのであります、しかし斯ることの效果は疑しくあります、而してこれは學課の相依といふことには太して關係がありません。ペスタロツチは手工(例へば紡車)を最初先づ十分に練習して、習慣性として了ふのであります、さうすれば數學のやうな智識的追求は一方手工をしながら同時に行ふことが出來るといふのであります、これは勿論分り切つた話であります。

相依の原理に就てはフレーベルの方がペスタロツチよりも遙かに注目し價ひする個所を多く持つて居ります。彼は言語や宗教や自然研究(數學をも含む)やは各孤立して存在し得ると想像することとは妄想であると言つて居ります、數學は自然研究を助けなければなりません、言語もさうであります、すべての智識は生々とした結合に於て在らねばなりません、「自己活動」及び「連續」に關聯し

て、フレーベルの組織の本質的要素として「連結」といふことがイギリスに於けるフレーベルの徒によつて唱へられました。彼の奨励して居る兒童の歌は生活と行爲とに結び付けられなければならぬのであります。

連結せられない學課（フレーベルが幼時行はせられたやうな學校に於ける綴字法の如き學課）は何へも關係がなく、たゞ宙にぶら下つて居ります、而して直きに忘れられて了ひます。學課目が嚴格に區別せられるのは民族的、教育的の進歩に於て後に起るべき技巧的の事柄であります。

吾人近代人の學ぶべき主なる學課は具體から抽象へ進み、現實の上に形式を築いて行くものでなければなりません。作文の題は孤立した主題を選ばずに、既に學んだ地理なり、歴史なりから選ぶやうにすべきであります。算術の練習問題にも歴史や地理や科學を用ゐることが出來ます、例へばバイカル湖の深さと海面との關係や英國諸王の平

均在位年限やは直ちに取つて算術の練習問題とすることが出来るではありませんか。歴史を學ぶ時には大きな聲を出して讀み、事實を覺えると共に讀書の熟練をも得るやうにするのであります、それから歴史を學ぶ時地圖を掲げて置くことは言ふまでもありません。

フレーベルのお話は單にお話だけではありませんでした。お話は中心で、圖畫や具體物や唱歌遊びや口演やがお話に關聯して居てその指揮に従つてゐたのであります、ヘルバルト學派の人々は一つの學課が他の學課の助けとなることの興味あることを指摘して倫理的根柢に於てもこの集中の必要なることを説いて居ります、フレーベルも同じ位熱心にこの集中を説いて居るのであります。

フレーベルの組織には中心學課（ヘルバルト主義が或る形式に於て現して居るやうに）といふものがあるでせうか、もし有りとすればそれは「自然研究」であります、しかし近代の學課目中に

は「自然研究」といふものはありませんから、この問題に對してあまり嚴格に述べることは避けたいと思ひます。

ペスタロツチとフレーベル

との類似

フレーベルの思想がペスタロツチの思想に如何に近似であるかを示すために兩者の類似點を抽き出して次ぎに掲げてみませう。

(一)「人間の神性」に關する漠然とした萬有神論的な見解、但しペスタロツチはこの信仰に於てかなり動搖してゐました。

(二)教育といふものは人間の内にある神の萌芽を自由、に自發的に成長せしめるのが目的であつて、技巧的若しくは習慣的の要求によつて指定された進路を辿つてはならぬといふ見解。これはフレーベ

ルに於て特に著しくありました。

(三)發達の階段に重きを置き、その各の階段は障礙が起らない限り兒童によつて連續的に通過されなければならないと主張した點。

(四)種々の手工的、表現的の仕事に重きを置いた事

(五)數學と自然研究と地理とを重んじたこと。

(六)會話の目的の爲めに室内及び附近の諸物を用ゐる言語力の產出に努めたこと。

(七)家庭教育に重きを置き、家庭及び四圍の情況に基いて學校教育を行ふたこと。(了)